

## ジュニアスポーツ教育学科

学科長

齋 藤 正 俊

SAITO Masatoshi

2014年度のジュニアスポーツ教育学科の講演会は国際教育センター開設記念にともない国際教育センターとの共催で行った。

### 1. 2014年度講演会

「スポーツ教育の未来を考えるーグローバルな視点からー」

実施日：2014年10月25日（土）

時間：15：00～17：30

場所：神戸親和女子大学 421 教室

参加者：129名

講演者：山口 香 氏（筑波大学大学院体育系准教授、日本オリンピック委員会理事、全日本柔道連盟監事）

開会挨拶：山本裕之（神戸親和女子大学学長）

閉会挨拶：山根耕平（神戸親和女子大学理事長）

講演会の講師として筑波大学准教授の山口香先生をお招きして、スポーツ教育の未来についてグローバルな視点から講演していただいた。

対象は本学の学生と近隣の一般の方々やスポーツ関係者である。

講演会は2部構成で実施された。第1部のテーマは「グローバル社会に適応した人材を育成するスポーツ教育」、第2部のテーマは「スポーツにおける女性リーダーの育成」である。

#### 1) 第1部内容

スポーツ指導者を目指す学生のために、指導者はどのような視点を持つべきかという話であった。はじめに2020年に行われる東京オリンピックについて、世界はどのような目を日本に向けているかについて話をされた。

世界はあらゆる方面で日本に注目している。日本は世界に「窓」を開いたのだ。故に全柔連の女

子への暴力問題や都議会議員のセクハラ問題等について注目している。

そのような状況にあってスポーツをどのように生かしていくべきなのか。スポーツ指導者としてスポーツを通してどういう人間を育てたいかが問われている。自分自身が経験したことをどう生かしていくのか。

このようなことについて先生の専門である柔道から創始者の嘉納治五郎の教えである「精力善用」「自他共栄」を例に話がすすみ、柔道、スポーツは自己の完成を目指し世の中に役立つ人材の育成が目的であると話をされた。

最後に、スポーツの力は考える力である。指導者は選手自身が考える力を持てるように選手を育てなければならないとまとめられた。

#### 2) 第2部内容

女性リーダーの育成についての話である。

女性のスポーツを取り巻く環境から歴史的経緯を話され、スポーツは女性を強くしてきた自分たちは切り拓いてきた。あなた方もこれから切り拓いていかなければならないと述べられた。

男女の違いについては、その違いを差別ととらえるのではなく、違いを理解しプラスに変えていく必要がある。まだまだ女性のリーダーは少ないがこれからは増えてくる。要請されたら自分ができるように準備しておく気持ちが必要である。

指導者は伝える力を持ったリーダーを育成していかなければならない。

指導者は風、選手は翼と表現して、終了した。

#### 3) 質疑応答

時間の関係上、1部、2部ともに受付時、参加者に質問記入用紙を配布し、休憩時及び終了時に質問事項を記述してもらい、その中から主催者側で選んだ項目に回答する方式を採用した。

### (1) 1部質疑応答

- ① 暴力と暴力でない境界線はどう判断するのかの質問については、小さい子どもが大人の言葉を理解出来ない場合、危険を回避するために躰けの意味で手等を叩くこともあるかもしれない。言葉が理解出来る年代には言葉で理解させる事が基本である。伝える言葉を持つことが指導者であると述べられた。
- ② 部活動の在り方については、勝つことを目指すことが大事で、勝たなければならないとは違う。優勝を目指し努力する。最初から2番を目指すのではない。それは競技者として間違っている。優勝を目指した結果の2位は価値があり評価に値する。その評価を指導者は選手に伝える言葉を身に付ける必要がある。勝ちたいなら1番を目指して努力することと応答されたが、部活動としてはスポーツを楽しむ部があってもよい。目的をはっきり分けて考えれば良いとも回答された。
- ③ 昔の選手と今の選手との良いところと悪いところはどのようなところかには、昔は考えて分からないと行動できなかったが、今の選手はまずやってみるという行動力がある。しかし、先を見ないで動いている欠点もある。行動力があるのだから創造する力を付けると良いと答えられた。
- ④ 世界の指導者を見て1番優れている指導者とはどのような人なのかの質問には、自分独自のものをしっかり持っている人が1番である。個性を持つこと。ある世界大会の優勝チームの監督はミーティングの予行をしていた。これが監督のプロと思う。情熱があればいいという事ではない。情熱はスキルではない。指導者は学ぶ姿勢が必要と回答された。

### (2) 2部質疑応答

- ① リーダーとしておれずに立ち向かっていく心構えについての質問には、リーダーは孤独である、孤立するので他人から意見を言われなくなる、その場合いやなことでも言ってくれる助言者を置いておく方が良いと述べられた。
- ② 男女の立場を語り合って理解できる場が必要なのではには、その通りでできるだけ機会を持

つようにしている。女性の身体的なことへの配慮も必要なので女性のスポーツドクターを増やし、海外の大会に帯同できるように活動していると回答された。

- ③ 女性のチームに男性の監督がいるが男性のチームには女性の監督がいないのはなぜかの質問には、男性の方がスポーツに関係してきた歴史があるので人材が多いということである。しかし、2020年のオリンピック、パラリンピックに向けて女性の監督を増やせないかとJOCも考えている。その可能性のある人は受ける覚悟をしておいて欲しいと述べられた。
- ④ これから女性リーダーとして活動していく場合の新たな問題点はあるかの質問には、女性は子育てしているような場合精神的負担が大きいと答えられ、サポート体制の環境を整えることが必要になる。解決に向け女性だけで考えるのではなく男性の理解が必要である。自然にサポート体制が出来上がっているようになれば最良と回答された。
- ⑤ 女性が優位になることはあるかの質問には、どちらが優位という問題ではない。お互いが相手の立場を慮る形が一番良い。と答えられた。

2部構成で実施したが、ユーモアを交えた話術で参加者を引きつけ内容も適切で充実したものであった。

質問が多岐にわたったにも拘わらず、学生に理解できるように丁寧に回答されており、力強さの中にも先生の誠実な姿勢を感じられた講演会であった。